

環境審議会委員からの意見について

1 環境審議会における委員からの意見

7月30日に開催の環境審議会（以下「審議会」という。）において、次期京都市生物多様性プラン策定及び次期京都市地球温暖化対策計画策定の諮問を行った際、以下の意見があった。

○ 千葉委員（阪南大学経済学部経済学科准教授）

温暖化は家庭からの排出削減がまだ進んでおらず、生物多様性についても市民の意識や行動変革が必要とされているということなので、計画策定に市民や事業者に参加してもらうための体制づくりを検討してほしい。

○ 山田委員（京都精華大学名誉教授）

2050年の排出ゼロという脱炭素について、エネルギー起源の炭素以外に、プラスチック等の資源の炭素を何に代替するのか、それはおそらくバイオマス（生物資源）になると思うが、その中身を具体的に設定して議論しないといけないと思う。レジ袋だけでなく、もっと踏み込んでリードしてほしい。また、こうした検討では、生物多様性や温暖化対策を別々にやるのではなく、組み合わせて議論しないといけないと思う。

○ 森本委員（京都大学名誉教授）

熱中症対策をするとCO2排出が増えてしまうといったトレードオフの考え方ではなく、シナジー（相乗効果）の対応を考えたい。社会、環境、経済のシナジーをどうやって作っていくのかが重要。指針を設定する際にも、やる事が当たり前であったり、やれば儲かるなど、取り組みが動くしくみづくりについての提案に踏み込んでほしい。

【発言順に掲載】

2 審議会後の委員からの意見

時間の都合上、審議会内で発言しきれなかった意見については、後日メール等で意見をいただいた。

○ 笠原会長（京都大学名誉教授）

- ・ 生物多様性の「わかりにくさ」については、私も実感している。分かりにくさの解消は、実践や見聞を通し肌で学ぶことが第一であり、その手段は対象年齢により大きく異なるように思われる。長期的観点からも、将来を担う若い世代には多くの勉強の機会が与えられるよう願っている。
- ・ 生物は、大きくは動物と植物に分かれるが、資料等からは植物の観点が少ないように思われる。

- ・ プランに含むことは難しいかと思われるが、気候変動が進み、大規模洪水など自然災害による動植物の生息環境の破壊が心配される。

○ 瀧委員（京都地方気象台長）

生物多様性関連のデータ不足について、気象台では全国で、「生物季節観測」を行っており、京都では、現在17種類の植物、10種類の動物について、開花や初見などの観測を実施している。（情報提供）

○ 山本委員（平安女学院大学国際観光学部国際観光学科准教）

地球温暖化対策や廃棄物対策などとの融合について、生物多様性部会において、現在同時進行されておられる温暖化の各部会研究会での議事録などを情報共有し、それぞれの議論を踏まえて、プラン策定を進める必要があるのではないか。

【五十音順に掲載】